

笑いで歴史学を 変える方法

歴史初心者からアカデミアまで

京都府立大学文学部准教授
Office Iocularis 室長

池田さなえ

異端にして気鋭の歴史学者が発見した

エンタメとアカデミズムを架橋する

まったく新しい&スリリングな

歴史学

のすすめ!

笑いで歴史学を変える方法

歴史初心者からアカデミアまで

池田さなえ

星海社

306



SEIKAISHA
SHINSHO

この世界には、どうも怒っている人が多いようだ。店の店員に怒り、同僚に怒り、道行く人に怒り、SNS上の見ず知らずの人にも怒り、果ては動物やモノにも怒る。他者に怒りを向けられない心優しい人は、自分の中に怒りを向ける。「怒りエネルギー」はうまく振り向ければ人を成長させてくれるが、多くの場合他者とのいざこざを招いたり、自分自身を傷つけたりする恐ろしい力でもある。

この本のテーマである「歴史学」も、「怒りエネルギー」を動力源として発展してきた学問であった。

こんなことを言うと、「いや、何を言っているんだ。歴史は面白いものだ。怒りなどとは無縁だ」というような声も聞こえる。

しかし、そのような怒りは次のいくつかの点を見落とすという大きな勘違いをしている。

• 「歴史」と「歴史学」は違う

• 「面白い」と怒りは相反するものではない

何を言っているのか全くわからない、という人にこそ、この本をオススメしたい。この本は、次のような人にこそ手に取って読んでいただきたいとの思いを持って書かれたものである。

A 「歴史」は好きだが、大学の歴史学者には常々不満がある

B 大学・大学院で歴史学を学んでいるが、違和感がある

このような方々には、「怒りエネルギー」に突き動かされて、次から次へとページをめくっていただけるだろう。

一方で、次のタイプの人たちにとってはこの本は表紙からして食指が動かないかもしれない。

C 大学で歴史学を研究している。世間一般の「歴史好き」と私は違う！

この本が目指したことは、むしろこうしたタイプの人たちが読んでこそ実現への扉が開かれるのだと筆者は考えている。

最初に申し上げておくと、この本には信長も卑弥呼も、龍馬も新撰組も出てこない。明日すぐに使える歴史うんちくも、ない。『笑いで歴史学を変える方法』というタイトルから、このような辺りを想像してページをめくってくれた方々にはたいへん申し訳ないが、「そつ閉じ」してその周囲にある本を手にとっていただいた方がよほど有意義である。

この本は、大学で歴史学を研究する筆者が、大学の中から大学と、学界と、世間を見るときで感じた問題を提示し、大学の中からその問題を少しずつ変えていこうとする「実践の書」である。「怒りエネルギー」を「笑いエネルギー」に変換してみたら、「歴史」と「歴史学」をめぐる様々な問題がどうなるかな？ という知的好奇心だけで、「やってみたく」なっていて、やった。筆者のキャリアにとって黒歴史になるかもしれないが、後悔はしていない。知的好奇心は、あらゆる学問の源泉である。この本は、学問を前進させる根源にある知的好奇心から、これまで誰も触れようとしてこなかったところに触れてみたり、動かして

みたり、そうしたことをついつい「やってみた」くなってしまふ歴史学者の手になるものである。

「笑える」歴史学雑誌の実践と困難

筆者は大学で日本史学を専攻し、大学院に進んでから十数年間、日本史学の研究に携わってきた。その間、京都の某国立大学、地方の某中小私立大学を経て、現在京都の某公立大学に勤めている。前任校の元教え子の軍オタから提供していただいた例だが、単純な規模でたとえると戦艦で訓練を積んだあと駆逐艦くしゅくかん乗りになり、二年の航行のち重巡洋艦じゅうじゆんようかんを乗り回すようになったような具合である。筆者の同僚どうりょうの大半は戦艦や空母くうぼからこの重巡に乗り換えた人びとであり、短いキャリアの中であらゆる艦種を乗り回し、あらゆる艦文化を甲板かんぱんから船底まで知った人間はそう多くはないと感ずる。筆者は明らかに浮いていた（艦だけに）。

しかし少し外に目を転じれば、筆者と同じかそれ以上に多くの艦に乗ってきた人たちがいた。そうした人たちとは会えばお互いの戦歴を労り合うのが常であるが、短いキャリアの中で筆者が感じたような問題には、共感はされても、それをどうにかしようという方向

には話が進まない。皆、日々を生きるのに精いっぱいなのだ。

かくいう筆者も、日々を生きるのに精いっぱいであった。今もその状況はあまり変わっていない。いっぱいいっぱいになっているときは、自然の摂理では「怒りエネルギー」が発生しやすい状態になっている。成果が出せない自分への怒り、評価がされにくいことへの怒り、所属大学による差別待遇への怒り。しかし筆者は、こうした「怒りエネルギー」の充満を感じながら、人を笑わせることばかり考えていた。怒りながら、笑いを追究していた。こんなことは、ふつう誰にも相手にされない。気づけば、筆者はやはり多艦種渡り歩き勢の中でも浮いていた。

しかし、幸いなことに、筆者にはわずかながら仲間がいた。この仲間たちとともに、学術雑誌『Historia Iocularis』（以下、「いお倉」）の旗を揚げた。この雑誌は、「一瞬笑えて、後からジワジワ考えさせられる」歴史学の論文しか掲載しないという明確なコンセプトを掲げ、二〇二三年六月に創刊準備室を発足させた。

当初は発起人の持つネットワークを使った口コミ、学会の全国大会での宣伝や学会誌への広告掲載など、主に大学や研究機関等で「歴史学」を研究している人びと（以下、「アカデミズム史学」の人びととする）を対象に周知していた。しかし歴史系の学会はひじょうに多

く、また研究者の中には学会にほとんど出なくなっている人たちもいる。さらに、アマチュア・ファンとして独自に優れた研究をされる方の存在も認知していたので、そうした人びとにまで届けるにはこの方法では限界があるとも感じていた。そんな折、とある経緯で朝日新聞社の敏腕記者の目に留まり、取材を受けることとなった。この取材は渡りに船、いや艦であった。

しかし、実際にこの取材が記事になり、アカデミズム史学の外にもいお倉のことが広く知れ渡ると、当初想定していなかったような反応が次々と押し寄せて来た。

投稿の大半はアマチュアの歴史家・歴史ファンで、「誰でも投稿できると聞いて来ました」というものであった。お気持ちは嬉しかったのだが、いお倉が掲げた理念が十分伝わらないまま、「誰でも投稿できる」という点だけがひとり歩きしているように感じられた。

皆の求めているものと、筆者らの作ったものとはだいぶ違う。皆の求めているもの——知識や学歴に限らず歴史好きが集まってワイワイ楽しくやれる場——はこの世に絶対に必要だと思う。しかし、そういうものは既にたくさんある。筆者らは、まだこの世にないものを見たいからこそいお倉を作った。そういうことが、どうすれば伝わるのか。「歴史好き」を否定したいわけではないのに、ややもするとそう受け取られてしまいかねない危険

性もひしひしと感じた。毎日毎日、この問題が頭の中を占拠するようになった。

とはいえ、大学や研究機関に身を置かない方々のお一人お一人にそのことを説明することもできず、さりとて単に「不採用」という通知をお送りするだけというのも心苦しく、しばらくは中途半端にお一人お一人に長めのメールで不採用の理由をお伝えしていた。しかし、実質的に筆者の個人商店であるいお倉ゆえに、この対応に明け暮れ筆者の本業はどんどんおろそかになっていった。また、神経質で繊細な筆者は、期待を込めて投稿されたであろう方々に不採用の通知をしなければならぬことの心苦しさに胸がつぶれそうになる毎日に堪えられなくなった。その結果、当初門戸を全開もんこにしていたいお倉は、断腸だんちやうの思いで投稿資格の制限をかけざるをえない事態となった。以下、これを「いお倉某重大事件」と呼ぶ。

この間の経緯で痛切に感じられたのが、アマチュア歴史家や「歴史好き」の人びととアカデミズム史学との深刻なコミュニケーション・ギャップであった。「笑い」とは何か、「面白い」とは何か、「歴史学」とは何か、「学術誌」とは何か、そうした根本的なところで、大きなズレがあるように感じられた。そもそのこの問題をどうにかしない限り、第二、第三の「いお倉某重大事件」を生むことになりかねない。

このような問題意識から、この本は生まれた。したがって、この本はいお倉の挫折^{ざせつ}の産物であり、「学術コミュニケーションの書」でもあるのだ。

「学術コミュニケーション」

「学術コミュニケーション」とは聞きなれない言葉かもしれない。大学や研究機関で行われている研究は、そのままでは多くの人々にとって何をやっているのかわからない。その難しい研究成果を、多くの人にわかりやすい言葉で伝える仕事が「学術コミュニケーション」である。海洋生物学に対するさかなクンさんのような存在と考えるともらえればわかりやすいだろう。博物館や科学館の人たちも、広い意味では「学術コミュニケーション」である。

ところがここで、ややこしい問題に直面する。歴史学においては、さかなクンさんのような存在が多すぎるのである。歴史好きを公言するタレント、歴史上の人物をモチーフにしたアイドル、歴史を扱うユーチューバーやSNSのインフルエンサーなど、「歴史」を多くの人びとに伝えることをなりわいとしている人はあまたいる。それだけ、歴史学が人気であるということでもあり、ハードルの低い学問だと思われることの表れでもあるだ

ろう。

このことだけを見れば、「歴史学においては学術コミュニケーションは十分行われている」と感じられるだろう。しかし、筆者の見るところ、アカデミズム史学とアマチュア歴史家とのコミュニケーション・ギャップは埋まっていないどころか、ますます広がっている。その結果が、先に述べた「いお倉某重大事件」である。

どうも、「学術コミュニケーション」の仕方が間違っていたのではないか？ いや、あれらは「学術コミュニケーション」のように見えて「学術コミュニケーション」ではなかったのではないか？ そのようにあれこれ考えた軌跡が、この本に活かされている。「歴史に学術コミュニケーション・ギャップなどあるのか？」と不思議に思った方々にこそ、この本は響いてくれることと確信している。

この本の構成

したがって、この本は、まずは世間の多くの人びとがイメージする「歴史」とアカデミズム史学の側にいる人びとが考える「歴史学」の違いから説き起こすこととなるだろう。遠回りなように感じられるかもしれないが、これをやっておかなければ、「笑いで歴史学を

変える方法」の話ができない。アカデミズム史学とアマチュア歴史家のそれぞれが持つ「笑い」がすれ違ったままなのが問題なのである。

次に、アマチュア歴史家の多くが感じているであろう、アカデミズム史学に対するいくつかの疑問を導きの糸として、アカデミズム史学とはどのような世界なのかを確認していく。これは、アカデミズム史学の中にいる人びとには自明のことかもしれないが、アマチュア歴史家という鏡を通して見る自画像によって、却って自身の立ち位置を新たに知ることにもなるだろう。また、歴史好きの方々の中にも「そんなことはとうに知っている」と思われる方々もいらっしやるだろうが、アマチュアの世界にも実に多様な人びとがいるのだということを改めて確認していただく機会として活用していただきたいと思ったのである。ここまでが第一部である。

第一部が基礎知識編とするならば、第二部はそれを踏まえた実践編である。アマチュア歴史家をタイプ別に分解し、それぞれチャート化してオススメ度、難易度を分析し、大学の外で研究を続けていきたい方のための簡単なガイドとなるよう工夫した。

最後に、ようやく「笑いで歴史学を変える方法」の話になる。ここまで読んで来られた方々とは、話の前提となる世界認識がほぼ共有されているはずだから、それを前提に思う

存分「笑い」の話をさせていただきたい。冒頭で触れた、歴史学は『「怒りエネルギー」を動力源として発展してきた』という話の意味は、ここで初めて解くことになるだろう。そして、その中で「笑い」を追究することの意味を、筆者の個人的な経験も交えて伝えていきたい。

アカデミズム史学に属する読者の皆様は、第一部、第二部は自明のことだからとして第三部から先に読み始めていただいても構わない。また、目次を見て興味のあるところから読んでいただく形でもよいだろう。しかし、第一部、第二部はアカデミズム史学に属する皆様にもぜひ知っていただきたいことを随所に盛り込んだので、一度は目を通していただければありがたい。

こうして、「笑い」と「歴史学」をめぐる航海を終えた暁には、「怒りエネルギー」でいっぱいであった皆様の心が、朗らかな笑いでいっぱいになっていくことを願ってやまない。

目次

はじめに 3

「笑える」歴史学雑誌の実践と困難 6

「学術コミュニケーション」10

この本の構成 11

第二部 アカデミズム史学とアマチュア歴史家

21

第一章 「歴史」と「歴史学」 23

「歴史学」の二つの顔 25

「歴史」の面白さと、「歴史学」の面白さ 31
学問としての「面白さ」と「笑い」 34

第二章 大学の歴史学者はなぜ融通が利かないのか 40

大学の歴史学教育の体系性 41

論文の「体裁」とは歴史学界のルールである 53

近年の歴史学界の水準——実証のインフレと理論回帰 56

大学教員は何をしているのか 62

大学教員の仕事 65

学外の業務 70

近年の大学を取り巻く問題 73

「生き馬の目を抜く」ような学界 74

若手研究者をめぐる問題 78

大学教員に手紙を送る行為 82

第三章 学会とはどのようなところか 88

学会の仕事 88

査読結果の通知基準 90

学会大会の開催 94

学会の運営委員 99

第二部 タイプ別・アマチュア歴史家のススメ 107

第一章 自費作家型 109

豊富な資金が必要 111

時間も無限に必要 114

「郷土史家」という選択も 115

アカデミズム史学への敵意 117

第二章 「発見」重視型 120

「発見」の価値 122

アカデミズム史学はなぜ一般受けする史料を発掘しないのか 127

「メデイアミックス型」という亜種 129

モデルケース 132

アカデミズム史学との訣別 136

強靱なメンタル 138

第三章 SNS・イベント活用型 141

憧れの歴史同人 142

SNS時代の歴史同人 148

アカデミズム史学とアマチュア歴史家の蜜月 150

第三部 学問と「笑い」

155

第一章 大学をめぐる「笑えない」現状

157

大学を取り巻く環境

158

大学の「ファストフード店化」

162

王侯貴族の庇護から大衆が「王様」の時代へ

166

国内の「異文化」

170

アカデミズム史学の単機飛行

175

第二章 「笑い」の力

177

優しくあたたかな不安

180

求められていないと知りつつ勝手に研究する

182

第三章

「笑い」を真剣に考えてきた学者たち

197

メタモルフオーゼの二年間 186

平山昇先生の「笑」撃実践 188

調子に乗って「笑い」に自覚的になる 194

「怒りエネルギー」を動力源として発展してきた歴史学 197

「怒り」への疑問 202

歴史上の人物を「好き」になること 204

ゴムゴムのやじ 207

ふんだんな比喻表現 211

『鼻行類』の衝撃 227

真剣にふざける 231

科学を「笑う」ことの意味 233

ユーモアと寛容 235

『鼻行類』を生んだ世界 237

無感情の文学 240

ベルクソンの『笑い』 244

イヴァン・ジャブロンカの理論 249

サンキュータツオからイグ・ノーベル賞へ 251

「笑い」の武装解除効果 257

ベンヤミンの「勉学的遊戯」とアガンベンの継承 260

おわりに 268

真の「学術コミュニケーション」とは 268

「笑い」の実践的歴史家として 270

さいごに、「歴史好き」の皆さんへ 272

あとがき 276

参考文献 280

第一部

アカデミズム史学と
アマチュア歴史家

自分たち平生科学の研究に従事しているものが全然専門の知識に不案内な素人から色々の問題について質問を受けて答弁を求められる場合に、どうかすると時々丁度このヤルカンドの歯医者者の体験したのとよく似た困難を体験することがある。……具体的な目的の詳細にわからない注文にびったりはまるような品物を向けることは不可能である。

寺田寅彦

第一章 「歴史」と「歴史学」

大学で歴史学を学んだ経験のない多くの方にとって、「歴史」とは二様のイメージで理解されていることと思う。一つは、小中高校までの学校で習った、暗記ばかりの退屈なお勉強であろう。「歴史」をこのように理解している人の多くは、その後一生涯歴史に興味を持つことはないだろう。

しかし、その中から一部、社会人となって人生経験を積む中で、世の中の酸^すいも甘いも吸い尽くし、人間のあらゆる側面を見聞した結果、歴史上の出来事や人物に突然目覚めたように興味を持つ人びとがいる。あるいは、学齢期でも、授業は面白くないが、YouTubeや漫画^{まんが}、ゲームなどの中で歴史が扱われているのを見て歴史を面白いと感じ、さりとて大学で学ぶほどではないよなーと思っている人たちも一定数いる。

このような人びとが抱く「歴史」のイメージが、もう一つのイメージである。すなわち、ドラマや漫画、ゲームなどの娯楽^{ごらく}作品の中で扱われている、「物語」「人間ドラマ」として

の「歴史」である。

歴史上の人物は、皆揃そろってキャラが濃い。戦国時代や幕末のような激動の時代であればあるほどに濃い。どんな漫画家や脚本家が智慧を絞ってもここまで面白くはできないというような絶妙の舞台装置が揃そろっている。したがって、この舞台装置とキャラを借用すれば、どんな人でもある程度面白い話を作ることができる。歴史物語は、前者のいわゆる「歴史嫌い」の中の、アレルギー級に重度のタイプを除けば、たいいていの人を面白がらせることができるのである。

一方、「歴史学」とは、そのような歴史物語とは全く別物である。簡単に言えば、「歴史学」とは大学で研究され、学会や学術誌上で発表され、議論が戦たたかわされる「学問」である。生物学や物理学、医学などと同じ「学問」である。

学問であるからには、物語としての面白さや文学的文章としての巧拙は二の次である。自然科学と同様に、論理性や方法の妥当たとう性、着眼点の独創性などが評価される。学生の卒論を指導していて、こういう不満の声をいただいたことがある。

「僕は／私は、趣味で小説を書いています。これまで何本も書いてきました。人より文章が巧うまい自信はあります。僕の／私の論文のどこがだめなんですか」

いお倉を始めてからは、投稿者からも同様の訴えを受けた。

これは単純に、「歴史」と「歴史学」を混同しているところからくる誤解なのだが、そもそもが歴史学という学問自体が全く異なる二つの顔を持っていることからくる避けられない誤解でもある。

「歴史学」の二つの顔

歴史学とは、そもそも「文学」的要素も持つ「科学」なのである。

歴史学は、学問の大きな括りでいうと、「人文科学」というジャンルに入れられることが多い。学問としては洋の東西を問わず、人間の文明社会が生まれたときから、すなわち古代から連続れんめんと続く、非常に長い歴史を持つジャンルである。人文科学とは、伝統的な学問の区分でいうと、哲学・文学と同じグループになる。ややこしい話になるが、この「文学」というのは、小説などの文学的文章そのものではなく、そのような文学的文章を研究対象とする学問という意味である。ところが日本語では、文学的文章のこと自体も「文学」と呼ぶものだから話がこんがらがる。ちなみにこの文学的文章としての「文学」には、テレビドラマや映画、漫画などの物語作品も広い意味では含まれる。最近では、歌手のポ

ブ・ディラン氏がノーベル文学賞を受賞したことなどからもわかるように、歌詞などの音楽芸術もこの意味での文学と見なされるのである。

話が大きく脱線してしまった。歴史学も含めた人文科学であるが、大学の学部でいうと、伝統的には「文学部」と呼ばれるような学部で修得できるものである。最近では謎の横文字学部ネームが流行っているのですが、その限りではないが、「総合フロンティア学部」であろうが「フューチャーイノベーション学部」であろうが、そこで文学や歴史学が学べるならば広義の括りで「文学部」と見なして話を進める。

一方、歴史学は法学や経済学などの「社会科学」のグループに属するという見方もある。実際、法学部で政治の歴史を研究する「政治史」、経済学部で経済の歴史を研究する「経済史」というジャンルがあり、それらはいわゆる文学部系の歴史とも非常に似ており、専門家でもはつきりとその違いを説明することは難しい。しかし、人文科学であろうと社会科学であろうと、「科学」には違いないのである。

科学とは、学問である。そして、学問をその他の活動と明確に分ける最大の特徴は、「疑う」ことである。あらゆる特徴を削ぎ落として、最後に残る学問の学問たる特徴は、「疑う」ことである。学問は、「疑う」ことによって発展してきたのである。学会で発表すれば

叩かれ、論文を出せば別の論文で叩かれ、本を出せば書評で叩かれる。筆者などもどれだけ叩かれたかわからない。しかし、この叩かれるという過程を経て、研究はより精緻せいちに、より正確になっていき、歴史学の知は積み上げられていくのである。

そしてひじょうに重要なことに、この批判それ自体も、他の多くの研究者からの批判の目にさらされているのである。したがって、批判者もそれなりの覚悟を持って批判をする。あまりに無茶苦茶な批判をすれば、その研究者自身が学問の世界で「あいつは大したことないな」「馬鹿なことやってやがる」と見なされることになるリスクを負うからである。アカデミズム史学の中の人が、「歴史学者でない人が書いたエッセイやノンフィクションではなく、学会誌に載のった論文や学術書を読みなさい」と言うのは、この批判し批判される過程を経ていることによって、その研究の質が担保たんぽされるということを知っているからである。

これに対し、物語としての「歴史」は、「疑う」ことが必ずしも必須ではない。もちろん、「この物語の運びはよくない」とか、「こうした方が面白い」という批判や指摘はあるだろう。Amazonのカスタマーレビューなどで読者が「これは面白くなかった」「このオチはないと思う」などと批判することもある。しかし、それは書かれている一つ一つの事実

や叙述を「疑う」こととは本質的に違う。

まず、AmazonのカスタマーレビューやSNS上での批判は、多くは匿名でなされるといふ点が最大の違いである。匿名である以上、いきおい無責任な批判になりがちである。批判の質も担保されていないのである。そして、作者はその批判の全てを真面目に受け取る義務もない。更に、一番大事な点なのだが、こうした批判は、物語としての面白さに対してなされる批判であって、事実認識や解釈の誤りを指摘するものではないということである。

いや、そうは言っても、ドラマや映画に対して「これは史実に反している」とかいう批判もあるじゃないか、文学でも「疑う」ことはあるじゃないか、とのご指摘、ようこそおいでくださいましたという気持ちで足が勇んでしまう。大河ドラマ視聴後ポストとかにありがちなアレだが、アレは文学に対して学問の風体でもって喧嘩をしかけているだけであって、文学が本来受けるべき批判ではない。文学の側からしても「知らんがな」案件なのである。もちろん、史実の方が面白いから史実に沿うべき、という批判はあつてしかるべきだが、その際も評価基準は「物語が面白いかどうか」なのであって、「描かれていることが正しいかどうか」ではないのである。

ちなみに、更に誤解を招きそうなので補足をしておくと、ここで言う「正しい」「正しくない」とは善悪のことではない。描かれていることが歴史的に明らかにされてきた知見に照らしてみて正確であるかどうかということである。

さらに、先ほど「学問の風体で」と表現したように、このような批判はそもそも「学問的」とすら言えない。学問は、そもそも学問どうしで戦わされるものであって、文学や芸術に対して異種格闘技をしかけることは求められていない。学問の世界のルールにしたがって発表された論文や学術書の形式で議論を戦わせるのが、学問的に「正しい」作法である。

さて、これに對しもう一方で、「歴史学」はその扱う対象や論述の手法からして、「文学」的にならざるをえないという側面もある。「歴史学」は、すべてひとしく過去の出来事を対象として研究される。そして、そのための手法としては、史料を何らかの問題・論点に沿って配列し、その問題・論点に対する結論を示すという流れをとる。しかし、その際多くの場合、史料を時系列に沿って配列するという手法がとられる。あるいは、時系列を逆転する形で、結果から原因を探るというスタイルをとることもある。しかし、いずれにせよ、論証の中で何か一つの出来事について、起^おこりから結末までを「叙述する」というスタイル

ルを全く使わずに論じられることはほとんどない。

過去の出来事を「叙述する」というこのスタイルに、「文学」が入り込む余地が生まれる。われわれが、家族や友人に、最近起こった出来事について話すことを思い起こしてみてほしい。われわれはその起こった出来事を、自身の関心や考えに沿って「配列」して「叙述する」。そこには既に、どんなにくだらない話であっても、物語が発生している。過去を語るということは、どのようなレベルであっても「文学」性から逃れることはできないのである。

大学の歴史学者が書いた本で、時に「科学」として優れているだけでなく「物語」としても面白いものがあるのはこのためである。これは、その学者が「歴史学」を物語として描く能力に優れているか、その学者の扱う研究対象が物語性を帯びているかのどちらかなのである。アカデミズム史学の中の人たちは、自らが「学術コミュニケーション」を担わなければならない場面もある。講演会や、メディア出演、そして一般向けの本の執筆などである。そうした場面では、学者向けではなく、一般読者向けを意識した書き方をする。その際に、文学としての面白さがあれば、より多くの読者に楽しんでいただけるだろう、と考えるサービス精神旺盛おっせいな学者もいて、そうした学者の書く本は科学Ⅱ学問でありなが

ら、確かに文学としても面白く読める。

「歴史」の面白さと、「歴史学」の面白さ

アカデミズム史学の側の人間が求める「面白さ」とアマチュア歴史家が考える「面白さ」が往々にしてずれ、コミュニケーション・ギャップを生んでしまうことは、このような二つの要素を併せ持つ「歴史学」の宿命なのである。そもそも、話している本人が「科学」として話しているのか、「文学」として話しているのかを明確にしないことがほとんどなので噛み合わなくなる。

そして、厄介なことに科学としての「歴史学」に面白さを感じる人と、文学としての「歴史」に面白さを感じる人は、多くの場合重ならない。学問としての「歴史学」がやりたくて大学に入った人は歴女や歴オタを侮蔑しがちであり、歴女や歴オタから大学に入って歴史学を学び始めた人たちは、「歴史学」のそういう雰囲気嫌気がさし、失望し、離れていく。あるいは、歴オタである自分を殺し、学問の側に完全に馴致してしまい、オタであった頃のことなどなかったかのように逆にオタたちを迫害する側に回るかのどちらかであろう。オタから入って苛烈な差別と迫害に耐えながらオタ性を失うことなくアカデミズム史

学の中に残り続けている奇天烈人間は、筆者くらいのものである。そうでなければ筆者がどこにいつても浮いてしまうわけがない。

文学としての立場から「面白い」というときと、科学Ⅱ学問としての立場から「面白い」というときの違いをよりわかりやすい対比で説明したい。前者の場合、たとえば本能寺の変という大・歴史スペクタクルや、それを招いてしまった人間ドラマの妙などが「面白い」と言われる。テレビドラマなどでも好んで取り上げられるテーマである。あんなに信頼関係にあった人と人が、こんな具合ですれ違つていつて、最後にはこんな悲劇的な結末に……という筋立てや、派手な殺陣や戦闘シーンの技巧に、人は「面白さ」を感じる。

一方で、後者の場合、たとえば戦後のおもちゃ屋店舗数を追いかけていくと日本の復興が跡付けられるのでは？ というような発想であつたり、そのおもちゃ屋店舗数を明確に跡付ける統計データがない場合、電話帳を使ってしらみつぶしに調べる方法を編み出してみた！ というような話であつたりを指して言われることが多い。つまり、古代の頭のいいおじさんが、影の動きから太陽の動きを測つたように、あるいは、中世の頭のいいおじさんが、水平線から上る船の動きから地球が球体であることを知つたように、「ソレから、アレを見える化したのかー！」という驚きにも似た感動を「面白い」と表現する。ここに

は、かっこいい筋立ても、心を揺さぶるメロドラマも、個性的なキャラクターも、究極のところ必要ない。

ただ、何度も繰り返すようだが、ものによっては後者の知見を文学的に「面白く」書くこともできてしまうのがこの話の厄介なところなのである。戦後のおもちゃ屋の話为例にとると、戦後の混乱から説き起こし、荒廃する人心、特に子どもの貧困、などを史料から明らかにしたうえで、電話帳分析とマクロの経済動向を関連させて、子どもの貧困の解消を間接的に読み取ったときに、描き方によってはなぜだか心が動かされてしまう場合もあるのである。ある種のドキュメンタリー、ノンフィクション文学の効果である。筆者などは、四国のある地方小都市の自民党系市議会議員に対するオーラル・ヒストリーから、地方都市の戦後の歩みを読み取る現代史研究に心が揺さぶられ、涙してしまったことがある

【倉敷二〇二二】。

しかし、涙するか笑うか怒るかはあくまで読み手の勝手であり、本来学問としての「歴史学」に求められている効果ではないことは、何度でも強調しておかなければならない。ただ、心を揺さぶられる論文は、えてして学問としても良質であるということは、なぜだ

か言いうるように思われる。^{*1}

学問としての「面白さ」と「笑い」

ここまでの話をしてきて、「ちゃんと伝わってる……？」と不安になる筆者である。既けうすすお感じであろうが、学者というのははつきりとした物言いのできない生き物である。「こうである、と思われる」「こうである、と考えられている」「大半の場合、こうである。しかし例外もあって、モニョモニョ……」といった具合で、1%でもはつきりしない箇所があるものなら断言はしないし、1%でも先ほど言ったことと違う事例があるものなら後から補足的に付け加えてしまう。そして、その結果話は混乱し、「なんだったっけ?」「何を言ってたんだっけ?」と元のところに戻らなければならぬことがよくあるだらう。しかしそれこそが、学問的誠実さなのだとかかってほしい。学問とは、そういうものなのだ。逆に、断定口調をしてくれる人や難しいことをわかりやすい言葉で簡単に説明

*1 この辺の話は、最近ヨーロッパの歴史学界で一つの潮流となっているようなので、興味のある人は巻末の参考文献にあるイヴァン・ジャブロンカの本をどれか一冊でもよいので読んでみてほしい。

してくれる人には、安心は感じるかもしれないが詐欺師の可能性が高いから警戒した方がよい。

さて、ここまで文学としての「歴史」と学問としての「歴史学」の違いについて見てきた。もうめんどくさいのでこれ以降は「歴史」と「歴史学」と書くことにするのでつけてほしい。「歴史学」についてはもう括弧かっこも外そうと思う。時折強調のために括弧を戻すこともあるかもしれないが、基本的には括弧なしで用いることとする。

ここからは、更にややこしい話になる。今まで何の説明もせずに、しれっと「面白い」「面白さ」という言葉を使ってきた。表紙からこの本を手にとってくださった方は、この「面白」がすなわち「笑い」なのねと思っておられることだろう。

違うのである。

実は、「面白い」と「笑い」の間にもまた一筋縄ではいかない問題が横たわっているのである。

これもまた、いお倉への投稿者とのやり取りから得た気づきである。いお倉には、アマチュア歴史家だけではなく、アカデミズム史学の方からも投稿をいただいている。驚くことに、大学を退職された名誉教授やベテランの教授陣からも問い合わせや投稿をいただく

ようになった。その中で、これを執筆している二〇二四年二月時点で採用が決定した論文は、ゼロである。ということは、おわかりいただけただろうか。いお倉編集委員が世界の大家の原稿を落とし続けているというおそるべき事態が発生してしまっているのである。

もちろん、いお倉は本来そんな命知らずなこととはしたくない。というか、アマチュアの方にも本当は不採用なんて伝えたくないのである。筆者は平和主義者の軍オタであり、人の嫌がることは極力したくない主義なのである。しかし、いお倉の趣旨と投稿された論文にズレがあると判断された以上、不採用にせざるをえなかった。

これには、アカデミズム史学の世界でいうところの「面白い」と、いお倉が求める「笑い」との間に、更に大きな断層があるということを意味している。

いお倉が「『笑える』歴史学論文受け付けてます！」と表明したとき、研究者の多くはこう理解した。知的好奇心をそそる逸話や逆説的ユーモアなどの、内容の「面白さ」を求めているのだな、ということである。たとえば、「平安貴族の日記に書かれている他人の悪口が赤裸々すぎて面白い」とか、「幕末の米海軍側と幕府担当者の交渉が噛み合っているようにで噛み合ってなくて面白い」とかいったような類の話である。いや、これでもまだやりようによっては許容範囲内だが、実際にはもっと硬くて真面目な内容の原稿を送ってこられ

る先生方が多くて弱った。あまつさえ、どこがどう笑えるのか解説付きで投稿された方がいたのには閉口した。先に挙げた二つの例は個人を特定したくないので別の例をひねり出したものだが、筆者のようなナチュラリストのお倉脳にはこれが限界であった。

これはまた、前節で説明した歴史学の「面白さ」とも違うことにお気づきだろうか。前節で見てきた歴史学の「面白さ」は、学問として「巧い!」「よくできている!」「あっぱれ!」という驚きに似た感動であった。ここで言う、多くの研究者が観念した「面白さ」は、史料の中から現れた、内容の「面白さ」であり、やや文学の側に寄っている。大学の研究者でさえ、「笑える歴史学」と言うとき、文学の面白さを観念してしまうのである。歴史学の持つ二つの顔が、いかに人を惑わせるかがおわかりいただけるだろう。

そこに、「どうです、面白いでしょう!」というドヤ顔が透すけて見えると、なんとも言えない気持ちになる。「笑い」を求めている手前、「笑えるものを送ってください」ということになるのだから、ウケを狙ったものが来ることには何の不思議もないのだが、あまりに露骨にそれをやられると恥ずかしくなってしまうことに気づいてしまった。こんな複雑な気持ちを味わったのは初めてであった。

きつと、複雑な気持ちになるということは、それがいお倉の求めている「笑い」とは違

うのである。なぜなら、こんな複雑な気持ちにならない「笑い」に、われわれは既に出合っていたからである。その話は第三部でも簡単に紹介することになるだろう。しかし、やはり実際に「こういうものだ!」と示さなければ十分に伝わらない。もちろん、そのエッセンスが伝わるようにWEBサイトには既存のいお倉的論文の例を挙げているのだが、おそらく原典にまで当たってしっかり検討される方は少ないのだろう。筆者は当初、自分が作った雑誌に自分で論文を書くのはお手盛りな感じがしてひじょうに嫌だったのだが、いお倉の言うところの「笑い」を示すためにもやらなければならぬか、という諦めあきらに似た気持ちになりつつある。

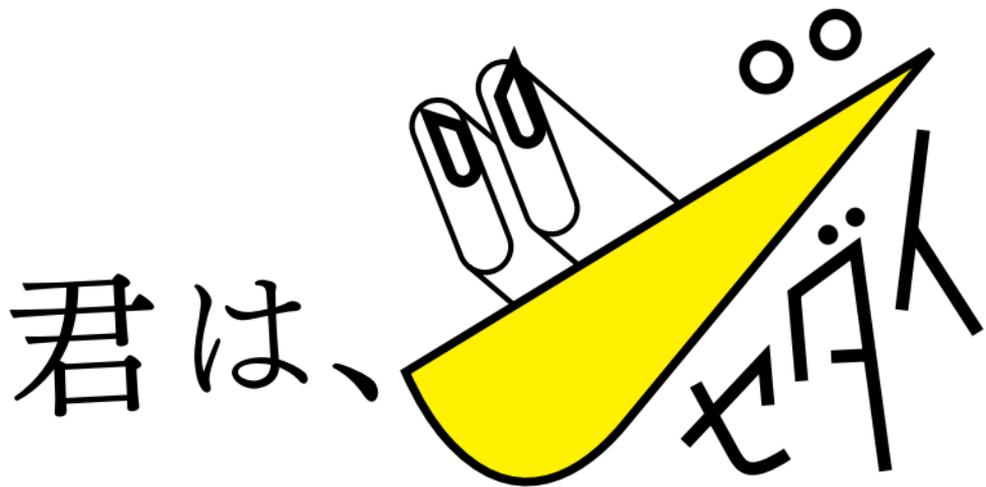
思うに、研究というものは、そもそも研究者自身がそこに知的好奇心を持って取り組むものである以上、極論すればあまねく全ての研究は「面白い」ことになる。ウケなんか狙わなくても、十分に面白いのである。

いお倉が求めた「笑い」は、そういう研究の内容にまつわる「面白さ」ではなかった。いお倉の求めた「笑い」は、たとえて言えば、虫の生態や理科室での実験に夢中になる少年や鉄道や兵器に夢中になるオタクたちを傍はたから見たときの「笑い」であった。そこには「狂気」がある。純粹にその物事を知りたいという欲求のみに突き動かされて、一見無意味

に思えるような、一文の得にもならないことに執念深く取り組んでいる、その姿勢の「狂気」である。

このような研究は、本人は全く無意識でも傍から見ても「笑える」ときがある。先に挙げたおもちや屋の例でいくならば、おもちや屋数の推移を知るために、戦後に刊行された電話帳を、全ての都道府県において一年刻みで全て収集し、全て人力でExcelファイルに落とし込んで作った表が、論証の中ではあくまでたった一行を言うただけに使われているとしよう。その労力にまず圧倒され、次いでそれに比して出てきた成果の小ささに脱力し、乾いた笑いが漏れる。そういう効果を持つ研究というのが、確かにある。

これは、前節で見た「面白い」歴史学の下位概念である。「面白い」歴史学の中に、「笑える」歴史学があるのである。しかし、「面白い」歴史学とは、学問的に良質な研究であるから、してみれば「笑える」歴史学というのは基本的に学問的に良質な研究でなければならぬということになる。仮にそれが文学としても「面白い」ということになれば、もはや神の領域である。また話をややこしくしてしまった。次に移ろう。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!